



西王母の源流：ベスが与えた図像的影響

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-05-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 重信, あゆみ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004432

西王母の源流

――ベスが与えた 図像的影響――

重 信 あゆみ

はじめに

「西王母」に関しては、『陔餘叢考』卷三十四（清の趙翼）に記載がある。そこでは、「世よ西王母を以て、女仙の宗と爲すは、列子及び汲冢周書の穆王八駿に乗りて、西のかた巡狩し、瑤池に宴して王母の觴を捧ぐるに出づ。又た、山海經に西王母、几に縋りて勝を戴くの語有り。因りて、漢武外傳相述いに附會し、遂に七夕に甘泉に會し、王母、仙桃を捧げて降るの事有り¹」と、西王母がしだいに女仙の領袖となったと述べている。けれども、西王母は、『爾雅』では、「觚竹、北戸、西王母、日下、之を四荒と謂う」と、西王母は地名であって、人名ではない²。そして、地名である「西王母」に引きずられて『山海經』や『穆天子傳』が作られたとしている。また、趙翼は、漢の貳師將軍が宛を伐ったときに、その国王の名が「母寡」であったことを挙げて、名に「母」という文字があったとしても、それが必ずしも女性を表すものではないということを述べ³、西王母が元来、女性ではなかった可能性を示唆している。

西王母の最も古い姿が記載されている『山海經』西山經には、「西王母は其の狀人の如くにして豹尾、虎齒にして善く嘯き、蓬髮にして勝を戴く⁴。」と、西王母が「豹尾虎齒」であったことが記されている。西王母に関しては、小南一郎氏をはじめ⁵、多くの研究があるが、『山海經』記載の西王母の姿に対しては、「古い西王母の様相⁶」と述べられるのみで、なぜ、「豹尾虎齒」なのかについては、これまで、ほとんど論じられていないようである。ただ、西王母が西方とつながりが深いことについては、小南一郎氏をはじめとして多くの研究者が述べているところである。それでは、『山海經』西山經にあるような「西王母」もまた外来の神の影響を受けていると考えられないだろうか。「豹尾虎齒」の姿で描かれた西王母図像は、管見の限り見当たらない。しかし、陝西省で発見された葉壺や画像石に描かれる「豹戯」と称される図像は、「豹尾虎齒」であり西王母もまた元来はこのような姿であったと考えられる。それでは、外国に源流を求められ

る「豹尾虎齒」の西王母は、どのような神であったのであろうか。本稿では、同じく「豹尾虎齒」に似た姿をもつエジプトの神である「ベス」(図1)と比較し、西王母の源流の一つとして「ベス」である可能性を探っていく。

ベスは、裸体で、ライオンの鬣のような髪、羽根のついた冠をつけ、口を開け、舌を出したり、歯を剥きだしたりし、豹の毛皮を着、豹の尾をつけたものもある。本来、ライオンの形状と関連しており、その後、豹と結びつけられている。また、辟邪の役割を担うことから護符にされた。西王母もまた画像石墓で墓門に描かれることや、『漢書』五行志下之上に「『母は百姓に告げん。此の書を佩ぶ者は死せず。我が言を信ぜざれば、門樞の下を視よ。當に白髪有るべし。』と⁷。」とあることから元来は辟邪としての役割があったと考えられる。



図1

『山海経』の西王母の容姿はベスと共通する部分が多く、辟邪という役割も類似している。また「蓬髪」は、ライオンの鬣、「善嘯」は虎嘯のようなライオンの雄叫びと解釈できるかも知れない。「戴勝」の「勝」は画像石にも描かれるように簪と理解されている。けれども、「戴」つまり「いただく」という動詞から考えると、「戴冠」の意味があるかも知れず、だとすれば、ベスの「羽根のついた冠」と結びつくかも知れない。また、李零氏は「戴勝」は本来は鳥のとさかであったという興味深い考察を行っている。

西王母が本来、異民族の神であったかも知れないことは小南一郎氏がすでに述べている⁸が、西王母の源流をベスだと考えることはできないだろうか。ベスは、ギリシアではゴルゴン⁹、アッシリアではバズズ¹⁰、フンババ¹¹といった神に変化している。エジプトのみではなく、地中海、中東地域にまで広がっていたことがわかる。また「夥(おびただ)しい数の人形や護符が、この人間に好意的な神を模して作られた¹²」とあり、中国にもその一部が伝わっている可能性はあるだろう¹³。古来より東西交流がなされていたことは、山田俊輔氏や江上波夫氏などが指摘していて、騎馬遊牧民によって東西に物が移動していたことは明かである。

『山海経』に元来、図が存在したという説は、郝懿行の『山海経箋疏』を始めてとして前野直彬氏、松田稔氏なども述べている¹⁴。前野氏や松田氏は、図像の文字化ということに関して、「海外経」以下について述べているが、「山経」にもいえるのではないだろうか。

図像は、類型的なものであればあるほど伝播されやすい。それに護符のような身を守る効果が加わればなおさだと思われる。図像の伝播は直線的ではなく網状に広がって

いくと考えられる。また一過性のものではなく何度も繰り返される。その過程で、さまざまなものに姿を変え、相互に影響を与えながら展開し、発展していくように思われる。ベスが源流とおぼしきものは中国の図像のさまざまなところに看取できるが、西王母もそのうちの一つではないだろうか。

1. 「西王母」の容姿

又、西のかた三百五十里を、玉山と曰う。是れ西王母の居る所なり。西王母は其の状、人の如くして豹尾、虎齒にして善く嘯き、蓬髮にして勝を戴く。是れ天の厲及び五殘を司る¹⁵。(『山海經』西山經)

西王母は几に梯子て勝杖を戴く。其の南に三青鳥有り、西王母の爲に食を取る。昆侖虚の北に在り¹⁶。(『山海經』海内北經)

西海の南、流沙の濱、赤水の後、黒水の前に、大山有り。名づけて昆侖の丘と曰う。神有り、人面虎身、文有り尾有り、皆白く、之に處る。其の下に弱水の淵有りて之を環る。其の外に炎火の山有り。物を投じれば輒ち然ゆ。人有り、戴勝し、虎齒にして豹尾有り、穴處す。名づけて西王母と曰う。此の山には萬物盡く有り¹⁷。(『山海經』大荒西經)

『山海經』の成立年代については議論のあるところであるが、『山海經』の中では「如人」から「人」へと変化している。「西山經」、「大荒西經」では「豹尾虎齒」と記載されている。しかし、このような姿を「西王母」として描いたものは管見の限り見当たらない。ただ、「蓬髮」「豹尾虎齒」に近い図像は鄭州画像磚である。(図2) 鄭州画像磚は、髪が蓬髮で、目を張り、口を開け、腰の所で杖のようなものを持っている。この「開口」「張目」は大形氏によると、辟邪を示しているという¹⁸。つまり、この古い様相をもつ西王母図像もまた辟邪の要素を含んでいるといえるのではないだろうか。この図像に関して小南氏は「古い西王母の様相¹⁹」としている。



図2

つぎに、西王母の姿が記されている文献は『淮南子』

であろう。『淮南子』覽冥訓には次のようにある。

西姥勝を折り、黄神嘯吟す²⁰（『淮南子』覽冥訓）

「勝を折る」ということから、この時の「勝」は、画像石にあるような「簪」をイメージしていたと考えられる。つまり、前漢時代には、簪を挿した女神が西王母であるという認識が存在したと考えられる。この辟邪から女神への転換は、「西王母」という呼称が一つの要因であったと考えられる。つまり、「母」という字にひきずられたために、女神であるという刷り込みが行われたのではないだろうか。また、李氏は西方の女神の図像が西王母図像に影響を与えたことを示している²¹。さらに、アルタイのパジリク古墳群から発見されたタペストリーの女神（図3）と男性の図像に関して、「王権神授、聖なる結婚（ヒエロスガモス）、あるいは死者の英雄化²²」と解釈される一方で、大形氏は、「女神が手にもつ不思議な形の植物を騎士に手渡そうとしている²³。」や「死者に生命力を與え、復活をうながしている圖²⁴」と解釈している。王権神授にしろ、生命力を与えることにしろ、西王母の役割の一つであると思われる。たとえば、「帝（舜）位に即するに及び、冀茨階に生え、鳳皇庭に棲み、石を撃ち石を拊ち、百獸率いて舞う。景星出で房地出で黄の馬に乗り、西王母白環²⁵玉玦を獻ず²⁶」とある。つまり、地上の王である舜に対し、神である西王母が玉を渡そうとする場面であり、パジリク古墳のタペストリーに描かれている内容と類似している。このような記載は、『晋書』に初めて現れ、これもまた図像の影響が考えられる。しかし、『穆天子伝』では、玉を持ってい



図3



図4

るのは穆天子であり²⁷、『晋書』では逆転が起こっているといえよう。また、『史記』司馬相如列伝には「白髮²⁸」と、蓬髮から変化し野獸的な要素は失われている。六朝期に成立したとされる『漢武帝内伝²⁹』には「年二十許りなる可し、天姿奄靄（えんあい）、靈顔絶世、眞に靈人なり³⁰」と、美しい女神としてその姿を定着させていくことになる。それでは、現在、西王母であるとされる図像をより詳しくみていくこととする。

まず、図4は、前漢中期に属し内蒙古包頭市の墓より出土した陶尊である。小南氏は「西王母はタケノコ状の山岳の頂上に、几に憑って坐っている。頭に勝を戴いてはいるが、傍に三足烏があり、すこし離れてはいるが、九尾の狐も見える」と説明している。ここでは、指摘されていないが、西王母の背後には几のようなものが描かれている。そして、これには、ダイヤ形ではあるが、「勝」のようにも見える。つぎに、図5は、TLV字鏡、あるいは方格規矩鏡と呼ばれるもので、前漢末期に出現するものである。このTLV字鏡が何を意味しているのかは現在確定されていないが³¹、樋口氏は六博盤であるとしている。おそらく、そうであろう。画像石では仙人（羽人）が六博盤で双六をしている様子が描かれている。（図6）その中になぜ西王母が描かれたのかについて、「西王母が、洞窟に籠もることによってその生命力を復活させ、永遠の生命を保っていると考えられていた³²」と、西王母が生命復活

に関係する神であったことから考えると、TLV字鏡において西王母は生命を復活させる役割を果たしていたのではないかと考える。つまり、女神としての要素を付け加えられたことによって、単なる辟邪ではない、現在知られているような長寿の神へと一歩近づいたことになるのではないか。つぎに、図2は前漢末から後漢初期の河南省鄭州画像磚である。この図像に関して、小南氏は「古い西王母の様相」とし、李崧氏はそれに対して「戴勝でない、頬のあたりにある蓬髮は、鬚であり、牙をむき出しにしているが虎歯ではないこ



図5



図6

と、豹尾がないことなどから、『山海経』の西王母像とはかけ離れている³³」と、図2が古い西王母図像であることを否定している。しかしながら、この図像は小南氏のいうように、『山海経』西山経に記述されている西王母ではないかと考える。なぜなら、西王母は当初、「西王母は其の状、人の如くして豹尾、虎齒にして善く嘯き、蓬髪にして勝を戴く」という姿をしており、「勝」は描かれていないものの、齒を見せ、蓬髪が描かれていることや、杖をもち悪霊を打ち払うかのような姿は、辟邪そのものである。西王母も墓門に描かれることが多いことから辟邪の役割を担っていたと考えられ、このように、形状の類似とともに役割の類似からいっても、鄭州画像磚の図像は元来の西王母の要素が含まれていると考えられる。最後に図7であるが、これは後漢初期の画像石に描かれたものである。目を見開き、口を開けて齒を見せ、鬚をたくわえている。また、耳にはイヤリングのようなものをつけ、頭に冠のようなものを載せている。その冠には簪のようなものを挿している。さらに短い手を前に置き、鬚の下方に縄のようなものがあり、端坐している。この図像の横には、「田王母」と刻まれ、この図の解説によると「凡に憑る」という³⁴。この図像に関して、小南一郎氏は「……人物は鬚を生やし、腰に綬を帯びている。西王母と東王公とが一つになったものであろうか……」と考察している。確かに、鬚をたくわえていることで男性的なイメージを持たせていると考えられる。ただ、鬚、張目、開口という特徴はエジプトの神であるベスと共通するものであり、そして、『山海経』西山経に描かれているような「虎齒」をもつ半人半獣の西王母とも重なるのではないか。つまり、この山東省の鬚の西王母は、東王公と一体化した図像であるよりもむしろ、より古い西王母の姿が残されたものであると考えられないだろうか。



図7

以上、前漢中期から後漢初期までの西王母の図像を紹介した。これらは西王母の図像でも最も初期のものである。陶尊や鏡に絵が描かれている西王母は女神として描かれているように見える。しかし、画像磚や画像石に描かれている西王母は、「張目」「開口」という恐ろしい表情で描かれており、これらの西王母の図像の方がより古い要素を含んでいるといえないだろうか。

次に、『山海経』に描かれているような「豹尾虎齒」の「西王母」の図像に類似した図像を紹介する。

2. 「豹尾虎齒」の図像

「豹尾虎齒」の図像は画像石にも多く描かれている。これらは多くのものが何を表したものであるのかわかっておらず、単に「神怪」と解説されるのみである。たとえば、山東省沂南漢墓墓門西立柱画像（図8）の解説には「虎の頭、頭の上には長い髪、丈夫な耳があり、口を大きく開け歯と舌を露わにしている。翼があり、丸いお腹で蹲踞をしているようであり、右足はその下の右向きで口を開けている虎の背中を踏んでいる。両足の間から尾が出ている³⁵。」とある。解説には「長い髪」とあるが、冠のようにも見える。また「開口吐舌」という表情は、辟邪を表している。この図像は、西王母図像の真上に描かれており、『山海経』に記載されている「豹尾虎齒」とその表情が類似していることから、元来の西王母の姿であるとも考えられる。つまり、女神としての西王母と元来の西王母の姿が二つに分かれて描かれたのではないか。また、同じ沂南漢墓前室西壁南側画像（図9）の解説には「画像の上には蹲踞している虎頭の神怪が刻され、垂れ耳、見開いた目、垂れた乳、太鼓腹、両手を上に挙げ、握っているようである³⁶。」とある。

この図像もまた、「張目」「齒を見せる」こと、そして、解説には記載されていないが「吐舌」が描かれ、図8と同様に辟邪を表していることも明らかである。これらの図像は、辟邪であるという役割がベスと類似しているだけでなく、「張目吐舌」のほかに、裸体、大きな腹、蹲踞という姿も共通している。さらに、特筆すべきは、陝西省陝西省米脂縣出土の西王母図像である³⁷。この図像は、墓門に描かれ辟邪を表しているようである。この図像は下半身が描かれていないので、上記に挙げた図像との関係性ははっきりしないが、「開口」「目を張る」という形状が類似していること、そして、墓門に描かれ、その役割が「辟邪」であると考えられることから、上記の図像と類似性がみられる。さらにベスとも形状、役割の面から類似性がみられるのではないだろうか。また、後漢時代のものであるが、牙をみせ、



図8



図9



図 10

尾があり、蹲踞している丹葉入れがある。(図10) 牙を見せ、目を見開いていることなどから「辟邪」と考えられ、その解説にも「辟邪形壺」と称されている。この図像もまた元来の西王母の姿を表すとともに、ベスの影響を証明できると思われる。

これまで、西王母の姿が「豹尾虎齒」から「女神」へと変化し、そして、その姿は外来からの影響がみられた。また、その役割も辟邪から王権神授や生命と関係のある女神へと変化している。女神である西王母については、李淞氏がすでに西方

の女神たちの図像的影響があった可能性を示唆している。しかし、西王母本来の姿である「豹尾虎齒」については言及されていない。『山海経』が図説の書物であれば、中国以外の地域で生まれた「豹尾虎齒」の姿をした神が中国へと伝わり、そこに記載されている可能性があるであろう。それでは、西王母の源流とも言うべき神はどのような神であったのであろうか。本稿では、それをエジプトの神である「ベス」である可能性について検討したいと思う。これは、ベスが本来はライオンの形状であるが、のちに「豹」と結びつけられて「豹尾虎齒」の姿で描かれていること、辟邪としての役割をもっていること、そして、地下世界に属しているというように、西王母と形状や役割が類似していることから比較に値すると思われる。また、ベスは護符として用いられたため広くオリエントの方にまで広がっていた。このようなベスが中国に流入した可能性は否定できないであろう。ただし、ベスの図像が直線的に入ってきたのではなく、その役割や姿の特徴を残しつつ、変化しながら中国に伝播したのではないか。ベスはギリシアではゴルゴン、アッシリアではパズズという神に変化するが、その辟邪としての役割は保たれている。以下では、そのベスについて、形状、役割をまとめておく。

3. エジプトの神、ベスの広がり

ベスの形状は、目を張り、口を開け、舌を出し、髭を蓄え、髪は蓬髪で、大きなおなかに、そして、膝を曲げ（まるで蹲踞の姿勢）、頭には冠のようなものを載せている。また、豹の毛皮を被っているのも、後ろにはしっぽが見える。(図11)

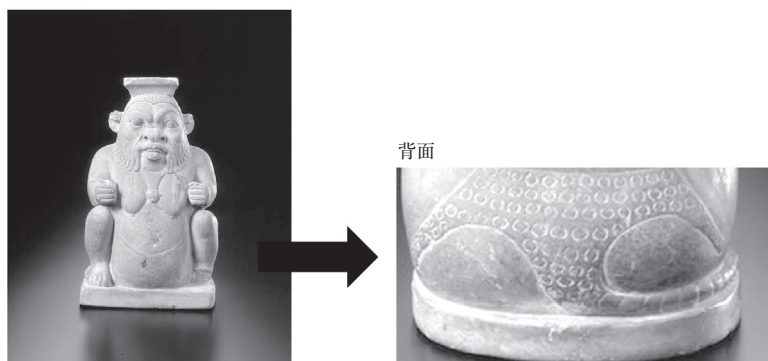


図 11

〈役割〉

ベスの役割は以下のようなものである。

戦いの霊であり、太陽と王の守護者である。あらゆる神秘的な悪に対する守護者として、その像は日常生活の品々（ベッド、枕、香油入れなど）を飾っている。また、動物から人間を守り、ホルスの石柱（シップ）に描かれる。

あふれるばかりの喜びの神なので、ハトホルと結びついて、音楽と踊りと酒酔いを庇護する。またミンと習合して、生殖能力を活発にする。最後にベセトとともに、出産を司り、新生児を守り、産室を保護する。後代には、その像が描かれた数えきれないほどの小像や護符が示している通り、汎神のベスは宇宙の守護者となる³⁸。

上記にあるように、ベスの主な役割は辟邪であり、特に女性や子供の守護神といえるであろう。そして、ハトホルやミンと結びついているように、ベスという神は、他の神と結びつきやすい柔軟性のある神であったといえるのではないだろうか。

〈ベスの姿〉

ベスの形状の特徴は、以下のようなものである。

- ・頭に羽毛の高いかぶり物を載せている。
- ・舌出し
- ・ライオンのたてがみ

- ・ライオン（豹）の毛皮を被る
- ・裸体
- ・足を曲げて立つ
- ・蛇のベルト
- ・タンバリン、ハープ、長太鼓、トランペットを持つ

これらの中で特にベスの特徴づけているのは、「張目吐舌」「高い被り物」「ライオン（のちに豹）の毛皮」である。そして、西王母もまた、「張目」「開口」「蛇」「ひげ」などの特徴を持つ図像があり、辟邪という役割も類似しているといえるのではないだろうか。西王母の「張目」「開口」「蛇」「ひげ」という姿は文献上は現れない。それらは、ベスの痕跡を残しているといえるのではないだろうか。

〈起源〉

ベスの起源については、諸説ある。その中でも、次の6つの説が有力である。

- ・格好は黒人アフリカの神であるようにみえるが、エジプト起源である³⁹。
- ・アラビアの神であり、アラビアからエジプトに輸入された。
- ・アフリカの神
- ・紅海の香料の国であるプント（東アフリカ沿岸ソマリア地方）からエジプトに紹介された。
- ・バビロニア起源
- ・シリア産の豹の毛皮を身につけていることから、シリア人を表現したものである⁴⁰。

ベス神が元来どこの神であったのかに関しては、ベスの図像があまりにも広範囲で発見されることなどから⁴¹、現在のところ確定的な結論はまだない。しかし、それほど広範囲に分布しているのであれば、ステップロードや海上ルートなどを介して中国に入ってきていた可能性を否定することはできない。

〈ベスという名〉

ベスは語源がはっきりしない。しかし、「戦士」という意味を表す「besa」に由来するようである⁴²。

〈描かれた場所〉

アミュレット、神殿の柱、容器、入れ墨などである。特に、アミュレットにされることが多かったように思われる。このように、アミュレットや入れ墨として用いられたことは、ベスの辟邪としての性格を明確にしていると思われる。大城道則氏はベスに関して次のように述べている。

ベス神は、時代を越え、さまざまな形にデフォルメされながら世界中に広まった。我々は、現在ベス神の末裔を世界中の至る所で目にすることができる。ギリシア神話のなかに登場するゴルゴン（メドゥーサ）やサキュロス（シーレーノス）などのプロトタイプは、一般的にベス神であると考えられている。ベス神の属性をそのまま継承し、実際子供の棺の上にゴルゴンの描かれたものも存在している。また、紀元前一千年紀のアッシリアとバビロニアの神であるパズズや、ギルガメッシュ叙事詩に現れる杉林のエンリルの守護者としてのフンババなども、その容姿の類似性からベス神と何らかの関連性があった可能性も考えられる⁴³。

このようにベスの各地域における展開について述べている。大城氏が「異なる文化が接触する時、その反応は、一般的に相互に影響し合い、変化をもたらすものである。」と述べているように、ベスは様々な地域に拡散し、その中で、展開をみせたと考えられる。それがギリシアでは、ゴルゴンとなり、アッシリア、バビロニアなどではパズズとなったと思われる。しかし、これらはいずれも「辟邪」としての役割は保たれたままである。

以上、ベスは各地域に拡散し、その「辟邪」としての役割を保ったまま柔軟に変化している。このようなベスが中国へと伝わった可能性は否定できないであろう。特に西周時期より東西交流が活発になりはじめ、その中でも騎馬民族は商人として交易の中心的存在になっていたようである。このような中で、主にアミュレットとして使用されていたベスが西から東へと伝わっていたのではないだろうか。

おわりに

『山海経』には、図説としての役割があったと思われる。特に海経に関して触れられることが多いが、それは、海経よりもさらに古い山経にもいえることだと思われる。図像が伝播した場合、様々な解釈がなされ、そして、その解釈をもとにしてさらに様々な図像へと展開していくことになったと考えられる。西王母の場合、現在では人の姿をした女神として描かれるが、『山海経』には半獣として描かれている。そして、役割もお

そらくは「辟邪」であったであろう。また、西王母が異民族の神であった可能性もあり、これらのことから、『山海経』記載の西王母の図像は辟邪の役割をもつ外来の神の影響があった可能性を否定できないのではないか。その源流の一つとして拙稿では、その「辟邪」という役割、西山経に記載されているような「豹尾虎齒」という姿の類似性、さらには広範囲の分布状況から、エジプトの神であるベスを挙げた。ただ、これはベスそのものが直接伝播したのではなく、ベスは諸地域に伝播し、その地域の中で辟邪としての役割を残しつつ発展し、さらに他の地域に伝播しながら中国に伝わり、『山海経』に描かれているような西王母として受け入れられたと考えられる。しかし、その後、「西王母」という呼称によって女神であるという認識が定着したと考えられる。その中でしだいに、画像石に描かれているような簪をさした女神となったと思われる。そして、当初「西王母」だと考えられていた図像は、あるものは、力士として、あるものは豹戯として変化したのではないだろうか。

【注】

- 1 世以西王母爲女仙之宗、出列子及汲冢周書、穆王乘八駿西巡狩、宴瑤池而捧王母之觴、又山海経に西王母綈几戴勝之語、因而漢武外傳述相附會、遂有七夕會于甘泉、王母捧仙桃而降之事。
- 2 按爾雅、觚竹、北戸、西王母、日下、謂之四荒。是西王母乃地名、而非人名
- 3 漢貳師將軍西伐宛、斬王母寡、亦其王之名母寡耳。未可以其名母寡、而遂爲女王也
- 4 西王母其寔如人豹尾、虎齒而善嘯、蓬髮戴勝。
書き下しは、前野直彬 全釈漢文大系『山海経・列仙伝』（集英社、1975年、133頁）を参考にした。
- 5 小南一郎『西王母と七夕伝承』（平凡社、1991年）
- 6 上掲、244頁。
- 7 母告百姓。佩此書者不死。不信我言、視門樞下。當有白髮。
- 8 上掲、71頁。

小南氏は「元来の西王母は、中原の文化からすれば、いささか“異民族”的な性格を備えており、中国の周辺民族の間から、おそらくは東周時期に、中原地帯に新しく流れ込んできた神格を核として形成された神だと考えて大過はないであろう。」と述べられている。また、森雅子氏は、地母神としての特性を「山岳の神」、「百獣の女主人」、「両性具有」、「医治療の神」、「神々の母」、「死の神」、「戦神」としている。そして、アナトリア（小アジア）を起源とするキュベレー、シリアの地中海

沿岸にあった都市国家ウガリットで崇拜をうけていたアナト、シュメールで信仰されていたイナンナなどをその例としてあげている。それらの神々と西王母とを比較したところ、西王母は上記の特性を持ち合わせていることから、森氏は西王母を地母神として位置づけている。森氏は西王母と女神たちの伝播関係を否定するが、キューパーレー、アナト、イナンナなどのような西方の女神たち、ひいてはその神々に影響を与えたと思われるエジプトの神々が、中国に伝播していた可能性は否定できないと思われる。また、このことに関して、李淞氏も「中国人が心中で西方の女神とした西王母は、実際に西方で出現した女神と関係があると十分に考えられる。しかし、われわれには、西王母信仰が地中海地母神信仰の中国版であると認識する証拠が十分ではない。かなり違った文化環境にある女神たちが、生育、豊饒、山林に居住する、百獣と伍するなど、似ている性質があるために、ある地域だけの専売特許ではない。私は、女神の性質からみて、西王母と地中海の地母神の関係づけるのは、うまくいかないと考えている。しかし、後者が図像において前者に影響を及ぼした可能性はないだろうか。」と述べ、地母神の図像が西王母に与えた影響を示唆している。このように、「西王母」の成立にはおそらくは異民族からの影響によるところが大きいと考えられる。

- 9 ゴルゴンとは、以下に述べるような女神であり、かつ、戦いの神であるアテナ女神の盾につけられた。これは、ゴルゴンの辟邪としての役割を物語っている。もともと三人姉妹で、世界も西の涯の、死の国に近い「黄昏の娘たち」ヘリペリスのいる国から、遠くない場所に棲まっていたという。その髪は一本一本が蛇のまむしで、大きな牙をもち、恐ろしい目をしていた。これを一目みると（もとは睨まれると、らしい）石に化けるのだった。金の翼で飛んだ、ともいう。三人の姉妹のうち、末のメドゥーサMedusaだけが、死ぬべき人間性をもち、あとの二人は不死だった。（吉田敦彦『世界の神話伝説 総解説』自由国民社、2002年、62頁。）
- 10 パズズは、風と熱病の神としてアッカド人に恐れられていたが、悪霊の王ということから護符にされることもあった。パズズの役割は、人々に病気を与える神であった。
- 11 フンババは、シュメールの一大叙事詩であるギルガメッシュ叙事詩に登場する杉の森に住む怪物である。「フンババはシュメール語原型ではフワワとして現れる龍蛇の怪物で、「その叫び声は洪水、その口は火、その息は死」と語られる。」（吉田敦彦『世界の神話伝説 総解説』自由国民社、2002年、106頁）
- 12 東京新聞編『オランダ国立ライデン古代博物館所蔵古代エジプト展』、82ベス神小像。

- 13 大形徹氏は、ベスの図像が馬王堆帛画の力士の図に影響しているのではないかという。大形徹「中国の死生観に外国の図像が影響を与えた可能性について—馬王堆帛画を例として—」（日本道教学会『東方宗教』第110号、2007年）
- 14 前野氏は、『山海経』がその図のための一種の絵解きの文章として書かれた（中略）少なくとも「海外経」以下の部分が前者の性格をかなり濃厚に示した文章を持つ…」と、『山海経』が図説の書であったことを論じている。（前野直彬『山海経』集英社、1975年、16～17頁）また、松田氏も『『山海経』海経の絵画の文字化』という言葉を用いて、『山海経』には先に図像が存在したことを述べている。（松田稔『山海経』の基礎的研究』笠間叢書 1995年、20頁）
- 15 又、西三百五十里曰玉山、是西王母居所也。西王母其状如人豹尾虎齒而善嘯、蓬戴勝。是司天之厲及五殘。
- 16 西王母梯几而戴勝杖。其南有三青鳥、爲西王母取食。在崑崙虛北。
- 17 西海之南、流沙之濱、赤水之後、黑水之前、有大山。名曰崑崙之丘。有神、人面虎身、有文有尾、皆白、處之。其下有弱水之淵環之。其外有炎火之山、投物輒然。有人、戴勝、虎齒、有豹尾、穴處。名曰西王母。此山萬物盡有。
- 18 大形徹『中国古代の靈魂観 魂のありか』（角川選書、2000年）250頁。
- 19 前掲『西王母と七夕伝承』、244頁。
- 20 西老折勝、黃神嘯吟
- 21 李早『論漢代藝術中的西王母図像』（湖南教育出版社、2000年）292頁。
- 22 リスティーヌ・フロン編、田辺勝美監訳『世界考古学大図典』（同朋舎、1987年）222頁。
- 23 前掲「中国の死生観に外国の図像が影響を与えた可能性について—馬王堆帛画を例として—」、14頁。
- 24 同、14～15頁。
- 25 「玦」は環でその一部に割れ目があってC字状のものをいう。古人はこの「玦」をもって決絶を暗示し、一方「環」をもって帰還や関係回復を暗示させた。
- 26 及即帝（舜）位、萇莢生於階、鳳皇棲於庭、擊石拊石、百獸率舞。景星出房地出乘黃之馬、西王母獻白環玉玦（『宋書』志第十七・卷二十七）
- 27 天子賓于西王母。乃執白圭黑璧以見西王母（『穆天子伝』卷三）
- 28 西望崑崙之軋洸沕忽兮、直徑馳乎三危排闥闔而入帝宮兮、載玉女而與之歸舒閭風而搖集兮、亢烏騰而一止低回陰山翔以紆曲兮、吾乃今日睹西王母矍然白首載勝而穴處兮、亦幸有三足烏為之使必長生若此而不死兮、雖濟萬世不足以喜。
- 29 「漢の武帝が西王母・上元夫人と宴をともし、「五岳真形図」『五帝六甲靈飛等

十二事』の二書を受けられることを描いた伝記。『道蔵』（洞真部137）に収められ、班固の撰というが実は六朝期の偽作。」（野口鐵郎・坂出祥伸・福井文雄・山田利明編『道教事典』平河出版社、1994年、82頁）

- 30 可年二十許、天姿奄靄、靈顏絶世、眞靈人也。
- 31 TLV字鏡の紋様については、現在さまざまな議論がある。このことについて、樋口は以下のように紹介している。（樋口隆康『古鏡』新潮社、1979年、138～140頁）
S・M・カプラン：宴席で演じられた占い用の占星盤ではないか。
ミューラー：日時計図案説（天文学的意味）
イエッツ；LとVは時間を示し、Lは四点（夏至、秋分、冬至、春分）、Vは四季の始めを示し、LとVとで一年の八期をしめす。またTは空間を意味している。
楊聯陞；六博盤
カマン；古代建築、明堂のレイアウトであって、宇宙を表徴したものである。（方形は地のプランである。Tは四方の間をあらわし、Lは地の果にある沼沢地を限る柵である。曲がっているのは悪霊が真直ぐ中に入ってくるのを防ぐためである。Vは地の四方にある四海の方形の一部であって、地の上に天を意味する壁をのせたとき、方形の一角がカットされた部分であるという。この壁の円形と鏡の円形が一致する。中心の鈕は中国をしめし、これが宇宙の中心であるとするのである。そして八個の乳は天を支える柱であるといっている。
ビュリング女史；天蓋？
- 32 前掲『西王母と七夕伝承』、76頁。
- 33 「図中怪神未戴勝、袋辺与其蓬髮、不如說是胡須、露牙但非虎齒、未見豹尾、（中略）總之、与『山海經』描写相差甚遠、（中略）这也与当時流行的西王母像完全不同」李早『論漢代芸術中的西王母図像』（湖南教育出版社、2000年、70頁）
- 34 中国画像石全集編輯委員会・蒋英炬主編『中国画像石全集 山東漢画像石』第2卷（山東美術出版社、2000年）解説73頁。
- 35 「虎首、頂有長毛、堅耳、張口露齒和舌、有翼、円腹、作蹲坐状、右足踏其下一張口右行的虎背上、両足間露尾。」（中国画像石全集編輯委員会・蒋英炬主編『中国画像石全集 山東漢画像石』第1卷、山東美術出版社、2000年、解説60頁）
- 36 「画像上刻一蹲踞的虎首神怪、垂耳、瞪目、垂乳、鼓腹、双手上举、似握一帶。」（前掲、『中国画像石全集 山東漢画像石』第1卷、解説64頁）
- 37 この図像に関して、「…上部虎頭応は西王母、『其状如人、豹尾、虎齒、善嘯…』形象的象徵。（…上部虎頭はまさに西王母で、『其状如人、豹尾、虎齒、善嘯…』とい

う形象の象徴である。)」(中国画像石全集編輯委員会・蔣英炬主編『中国画像石全集 陝西、山西漢画像石』5巻、山東美術出版社、2000年、図60、解説15頁)と解説されている。

- 38 ステファヌ・ロッシニ、リュト・シュマン=アンテルム、矢島文夫、吉田春美訳『エジプトの神々事典』(河出書房新社、2007年、50頁)
- 39 同上
- 40 大城道則『古代エジプト文化の形成と拡散—ナイル世界と東地中海世界』ミネルヴァ書房、2006年) 165頁。
- 41 大形氏によると、中央アジアでもベスは発見されている。(前掲「中国の死生観に外国の図像が影響を与えた可能性について—馬王堆帛画を例として—」、20頁)
- 42 Lewis Spence 「Myths and legends of ancient Egypt」(GG.Harrap,1915,pp285) ...Though many names were given to him later, Bes was his usual appellation, which,according to Wiedemann, is derived from besa, a word designating one of the great felidae, the Cynaelurus guttatus, whose skin formed his clotting....
- 43 前掲『古代エジプト文化の形成と拡散—ナイル世界と東地中海世界』、169頁。

〈図版出典〉

- 図1 ベス像(ステファヌ・ロッシニ・リュト・シュマン=アンテルム『エジプトの神々事典』、河出書房、2007年、50頁)
- 図2 鄭州画像磚(異形の西王母)(小南一郎『西王母と七夕伝承』、平凡社、1991年、245頁、図64)
- 図3 バジリク古墳の秘宝、第五号出土のアプリケ(加藤九祚『西域の秘宝を求めて』、時代社、1969年、7頁)
- 図4 内蒙古包頭市出土、陶尊(前漢中期)(小南一郎『西王母と七夕伝承』平凡社、1991年 264～265頁、図82)
- 図5 鏡(王莽期)(小南一郎『西王母と七夕伝承』平凡社、1991年、273頁)
- 図6 四川合江張家溝二號墓出土、左側側面(25-220年、後漢)(中国画像石全集編輯委員会・蔣英炬主編『中国画像石全集 四川漢画像石』7巻、山東美術出版社、2000年、図207)
- 図7 西王母図像(画像石全集編輯委員会編『中国画像石全集 山東漢画像石』2巻、山東美術出版社・河南美術出版社、2000年、図221)
- 図8 山東省沂南縣北寨村出土 墓門西立柱部分(147-189年、後漢)(中国画像石全

集編輯委員会・蒋英炬主編『中国画像石全集 山東漢画像石』1巻、山東美術出版社、2000年、図184)

図9 神怪、山東省沂南縣北寨村出土、前室西壁南側 (147-189年、後漢)(中国画像石全集編輯委員会・蒋英炬主編『中国画像石全集 山東漢画像石』1巻、山東美術出版社、2000年、図197)

図10 江蘇省睢寧縣形壺(周南泉『中国古玉断代与辨偽 古玉動物与神异獸卷』下、天出版社、2007年、図3-9-5、320頁)

図11 MIHOMUSEM (<http://miho.jp/booth/html/doccon/00001646.htm>)

〈参考文献〉

小南一郎『西王母と七夕伝承』(平凡社、1991年)

大形徹「中国の死生観に外国の図像が影響を与えた可能性について―馬王堆帛画を例として―」(日本道教学会『東方宗教』第110号)

澤田瑞穂『中国の呪法』(平河出版社、1990年)

前野直彬 全釈漢文体系『山海経・列仙伝』(集英社、1975年)

松田稔『「山海経」の基礎的研究』(笠間叢書、1995年)

大形徹『中国古代の靈魂観 魂のありか』(角川選書、2000年)

林俊雄『スキタイと匈奴の文明』(講談社、2007年)

シルクロード調査研究所編『中国シルクロードの変遷』(雄山閣、2007年)

大城道則『古代エジプト文化の形成と拡散―ナイル世界と東地中海世界』(ミネルヴァ書房、2006年)

ステファヌ・ロッシーニ・リュト・シュマン＝アンテルム『エジプトの神々事典』(河出書房、2007年)

林已奈夫『中国古代の神がみ』(吉川弘文館、2002年)

曾布川寛『中国美術の図像と様式』(中央公論美術出版、2006年)

李早『論漢代芸術中的西王母図像』(湖南教育出版社、2000年)

画像石全集編輯委員会編『中国画像石全集』(山東美術出版社、2000年)

森雅子『西王母の原像 比較神話学試論』(慶応義塾出版会、2005年)

土居光知『文学の伝統と交流』(岩波書店、1954年)

吉田敦彦『世界の神話伝説 総解説』(自由国民社、2002年)

樋口隆康『古鏡』(新潮社、1979年)

Lewis Spence 「Myths and legends of ancient Egypt」(GG.Harrap,1915,pp285)